

## 復活節第四主日

2011.5.15

ヨハネ 10・1-10

今日も私たちは日曜日のミサのために、それぞれの生活の場からここに集って来ました。このミサに集っている私たちの心のうちには、それぞれの思いがあり、それぞれの願いと祈りがあります。それらの、私たちの心のうちにある思いや願い、祈りは、それぞれの生活の場で私たちが直面している事柄や、私たちがその中に置かれているそれぞれの状況によって、私たちの心にもたらされたものです。その全てを抱え込んだ、その全てに満たされた、それぞれの私たちのありのままの心をもって、今日もこのミサの場に身を置かせていただきます。

私たちの心のうちにあるものは、ことばになって、素直な祈りとして、そのまま神におささげすることが出来るものもあります。感謝に満ちた祈りとなって私たちの心を喜びで満たすものもあります。けれども、私たちの心はいつもそのような素直な祈りに満たされているわけではありません。むしろ、私たちの心は、私たちが生きる場が私たちの心に負わせる重荷に圧倒されて、もうこれ以上何も感じられない、何も受け付けられない悲哀に満たされていることのほうが多いかもしれません。自分でもどう整理したらよいか分からない心を抱えたままで、呆然と立ち尽くしてしまうことがあります。そのような自分がカトリックの信者として、ミサに通うことにどのような意味があるのだろうか。私たちの心が、私たちを取り囲む生活の状況に耐えられなくなるとき、いつも、私たちの心の中に湧き起こってきて、執拗に私たちの心に絡みつく抗しがたい思いです。

そのような私たちにとって、今日の復活節第四主日に毎年朗読されるイエスのおことばは、どのように響くのでしょうか。このミサに集う私たちはイエス・キリストを信じる信仰によって、カトリック信者とされた者たちです。そのような私たちとイエスとの関係を、今日の福音のおことばは、羊たちとその羊たちを守る柵の門のイメージで語っています。私たちはイエスへの信仰によって守られた柵の中に生きる羊たちであり、イエスご自身、羊たちがその柵に出入りすることの出来る門であるこのイメージは語っています。今日聴いた福音の先の部分では、イエスはさらにご自分がその羊たちの牧者であるとも言われています。牧者であるイエスは今日も私たちを導いて、ご自分の門を開け放って、この柵の中に迎え入れてくださいました。このように言うと、いかにも教会の司祭が言いそうな、手前味噌のように聞こえるかもしれませんが、カトリック教会に受け継がれてきたミサは正にそのようなものです。普段の生

活の中でさまざまな思いに引きずられ、それに満たされた心をもって私たちは生きています。日頃の生活を生きる私たちの心がどのような思いに満たされていようと、イエスの門をくぐってこのミサの場に身を置くと、私たちの心の中にあるそれらの思いが静まってゆくことを感じ取ることが出来るのではないのでしょうか。私たちの心の牧者であるイエスの呼び声に促されて、イエスの門をくぐってこのミサの場に身を置くと、ここには、私たちが受け入れたはずの信仰の世界が広がっていることを感じるはずです。ここには、普段の生活の場とは異なる、信仰の柵に守られた、牧者であるイエスとその牧者のもとにある私たちの世界が広がっているのです。その柵の中の特別な場において、私たちはイエスのおことばに親しく耳を傾け、無数の擦り傷を負った私たちの心を包んでいただき、イエス自ら分け与えてくださる、イエスのいのちのパンをいただくのです。イエスの開いてくださった門を通して、このミサの場に招き入れていただくことによって、洗礼によって、私たちの心に注ぎ込まれたカトリック信者としての信仰のいのちは息を吹き返すのです。

カトリック教会に受け継がれてきたミサは、十字架の死を前にしたイエスの弟子たちとの最後の晩餐にその源があります。しかし、ミサにはさらに旧約聖書に遡る前史があります。今日のミサの中で、私たちは旧約の神の民が歌い継いだ詩篇を歌いました。「主はわれらの牧者、わたしは乏しいことがない」という答唱句がつけられたこの詩篇 23 篇は日本の私たちキリスト者にとってもなじみ深いものとなっています。旧約の神の民はそれぞれの生活の場においても、この信仰の歌を歌ったことでしょう。けれども、神の民の一人ひとりがその生活の場でこの信仰の歌を自分たちの心の支えとすることが出来たのは、この歌が神の民の賛美の歌として、毎年巡礼祭のときにエルサレムの神殿で歌われた歌だからです。イスラエルの主である神の神殿に詣で、その聖なる場所に立って、この詩篇の歌声に包まれる時、旧約の神の民は、自分たちに与えられた主である神の大いなる庇護と導きを実感していたのです。神殿における大きな祭りのたびに祝われたことは、今私たちが旧約聖書を通して知ることが出来る、イスラエルの主である神が、彼らのために行ってください、神の恵みとしての救いのみわぎの数々です。旧約の神の民が年毎に神殿に詣でて祝った祭りは、彼らの祖先をエジプトの地から導き出し、シナイの山での契約によって彼らをご自分の民としてくださり、四十年に及ぶ荒れ野の旅の間彼らを養い続け、ついには、自分たちを約束の地に導き入れて下さった主である神への感謝の祭りです。旧約の神の民は、その祭りが祝われる主の神殿において、主である神のみ前においてともに一つに結ばれて、主である神がその民とされた自分たちのために行ってください、数々の恵みのみわぎを思い起こし、それを祝って、

感謝と賛美のいけにえをささげたのです。神殿の門をくぐって、その神殿の聖なる境内に導かれて、その祭りに参加することが出来た彼らは、自分たちが、そこで祝われている大いなる感謝の祭りの当事者たちであることを、身震いするほどの喜びで味わっていたのです。その心のうちに湧き起こる喜びを彼らは詩篇の歌に託して声高らかに歌ったのです。このような祭りの経験が、彼らの人生に影響を及ぼさないはずはありません。一年ごとに年を刻む彼らのそれぞれの生活はこれらの祭りを中心に営まれていたのです。そのようにして、この祭りの歌は彼らの日常の生活へと広がり、彼らの人生を貫いて、その日々の中で、もはやこの歌を歌うことが出来ないような苦境に追い込まれたときも、彼らの人生を最終的に支え続ける信仰の歌となったのです。

「わたしは門である」と言われるイエスの今日のおことばは、旧約の神の民が心躍らせてくぐった、神殿の門を思い起こさせます。その門をくぐってその人々が喜び歌った詩篇の歌を、私たちもこのミサの場で歌いました。私たちがこの信仰の歌を歌うことが出来るのは、このような歌を歌い継いで来た人々が生きた信仰の世界を開く門として、イエスが私たちをここに招きいれてくださったからです。この門の中で、私たちは私たちの真の牧者、私たちの主イエス・キリストと出会うのです。その主の導きのもとに、私たちはそれぞれの日常の世界から、十字架の死を超えて復活された主が指し示してくださった新たなのちの世界へと、この門をくぐって連れ出していただくのです。そのような道を行く私たちの心に、ここで歌ったあの詩篇のことばが響き続きますように。「主はわたしを緑の牧場に伏させ、憩いの水際に伴われる。主はわたしを生き返らせ、慈しみによって、正しい道に導かれる。たとえ死の陰の谷を歩んでも、わたしは災いを恐れない、あなたがわたしとともにおられ、その鞭と杖はわたしを守る」。それぞれの人生の日々の中で、この歌を歌う私たちを復活の主が、その復活の息吹をもって、力づけてくださることを願いたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高